俳諧

新選李涯歌句集

6

坤

へ 5
5312
6

門へ5
號 5612
卷 6

半日菴芳律編

俳諧 新選春浪發句集五編 乾坤 二冊

東京香同社藏梓

新選春浪發句集五編

乾の巻

中日庵芳律選
芙蓉庵文禮校
一具庵寿香閲

市街立秋　羽後　喰風
秋立て蓮宜市蓮葉も魚葉も　〃　月翁
時ゝ戸に秋立て清〃しう雨　〃　赤嶺
新市に紛れて市の立ち沢　〃　清美
人引ゝ葉　秋ハ立ち市の中　〃　清雪
浅ひ蓮も秋立て雨　新市　〃　清雪
立秋やうゝ市の中　羽前　琴柱

氷雪る声　秋立ぬ市は中　上毛　巌琴

市中や人もまばらに秋の立　呉羊

鮫やうな秋ハ立ぬる魚市場　上総　雙松

出雲に新うら秋たら御うれ　豊後　琪園

弗ぬ阿うら立ぬ町は秋　武蔵　松帆

秋立や蕎切なき朝の町　東京　対芳

帳たゝや蕎の子笠の都入　白羊

市引けて静や秋ハ立ぬる　芳緑

星月夜

浪光る氷る夜に解て星月新　羽後　木風

空てるく松風ひゝく星ゝ新　琪山

湯ゝる眺や浦の星月夜　以孝

中ゝに中切ゝ星月新　喰風

月夜てる又星ハ月夜うれ　信濃　蓬殘

蕎ゝ見る山の俤ゝ星月新　相模　一如

鮫ゝき門ハ中星ゝ夜　雙松

能い稚ゝ野も風吹て星月新　琪園

提灯を消ゝて寝ぬ星ゝ新　松帆

月夜て又面白ゝ星月夜　東京　治翁

飯膳を出ゝに出たら星月新　芳緑

秋日

初人の岸に華ゝ中秋日和　美濃　清泉

秋の日や足ゝ仕事の手くゝ　上毛　庫文

蕎ゝ畑ゝ秋の日御ゝ　巌琴

秋の日の美しき野辺を　伊豫　唐窓

江の日の漁りもよし　秋日和　羽後　聽泉

俳句の大きく美なる有磯海　月翁

秋の山は美し　山の粉ひて　以孝

俳句や軒きの早き深い秋　洪山

山の端に短い秋の日御ぶ　松軌

秋の日の倒れ屋きの床柱　東京　眠鷗

美しう秋の日の差す横うれ　可芳

七日八立田の秋よ行き　芳緯

秋の日を抱き伸ばす長糸瓜　文禮

秋夜

秋の夜や笑ひあるの物　相模　閑美

秋の夜や月をまき　窓も暗うして　上毛　玉桂

俳句の歌や島の蹴てを　、　歴山

秋の夜や　嘆ゆる　姫の外　羽後　蘭雨

秋の夜や　蟲の音　ふれ　笛人の来る　以孝

俳句の夜　降ちうる　秋の　秋の　洪園

秋の夜を　詠　ともせば　田の　可芳

秋の歌　知らぬ　すや　新舞　文禮

俳句の夜や　獨　行　芳緯

秋室

時雨降る　舟つ　秋の室　羽後　初卜

俳句　四　日　俳句室　清竜

秋の室　喰月
なかの弾たなつゝ　懸泉
月ハ出てあれとも淋し　秋乃室　伊豫　里燐
水色の遠ゆくゝ　秋の室　周防　歳年
澄ゆて水の　ゆくゝ　秋の室　清泉
時ゝとてさゝゝ　秋の室　上毛　士行
夜ゝ　なる雲みえて　秋の室
秋の室　蓑蘿　解くゝ　かさゝ　色
秋の室　簇　明ゝして　朧ゝ
百ゝ　ゝむはゝ　毎ゝ　秋の室　芳緒　文禮

秋水

陸上ゝ　丹物の色ゝ　秋の水　陸中　友山

葉ゝ　押たあゝ　秋の水　上毛　一徹
水ゝ　ゝ　秋の寂　武州　亀齢
流ゝ　ゝ　秋の水　信濃　逸水
細ゝ　ゝ　色の　秋の水　芳緒

秋暑

秋暑ゝ　ゝ忘られぬ年　雨　上毛　素白
野菜物也　暑ゝ　ゝ　多我
秋ゝ　ゝ　淋ゝ　ゝ　在
涼ゝ　ゝ　秋の暑ゝ　ゝ　近山
暑の寒ハ　ゝ　秋暑　士行
曲ゝ　ゝ　秋の暑ゝ　庫文
秋ゝ　嫁ゝ　又ゝ　伊豫　吳香

殆〳〵として死まる秋の暑うて
まる秋も暑い事〳〵さる山の色　羽後　一雪
知れて居る帳の日数の暑かな　貞雄
風呂上り秋の暑をもすれば　蘭雨
暑けれと添乃秋とて清きを　淇山
秋あり〳〵まる森悟　月翁
暑稲と初るとなく秋の暑うれ　本風
田の中まる梅〳〵秋は暑ぶ　雙松
とても暑〳〵秋面白の濡安　文禮
いまは西瓜茂の知る暑うれ　芳緒

後裕

着てもれ袋脱れぬ秋の裕ぶ　羽後　藤山

秋ケ子　二度着る秋の裕うれ、　梧風
亭居の皆着れ秋の裕う事〳〵、　盲人　為勤
着た人を見て着る帳は裕うれ　淇山
着ん人を問いる、秋の裕う事　法美
旅庶〳〵して着る秋のけうと　月翁
裕着ていよ〳〵秋のまうう　吉窓
裕ものう着ぶ秋の裕かな　松軌
元次も似も秋の裕う事〳〵　横浜　一舟
乙多の減るる着ぶる裕下素　東京　尚雲
旅先人屋も〳〵秋の裕うる　才芳
刈る田を見過て着る裕う秋　芳緒

木綿取

せちの春の月も似す本綿取　喰風　月翁
うしろ丁よ照られなうらよ本綿元
本綿元や寄せるゆる家斗り　一茶
元たゝけそよ春々うり　本綿畑　上総　白水
本綿取や照綿くりを春のうら　相模　青園
山ゝ面来こそ〳〵と本綿うゝ　雨山
誘ひ合ふ濤畠や本綿取　上毛　望山
茅ヶ崎てふ地元鄙す本綿うれ　近山
忙なき姿ゆうせ本綿元　一誠
家内中出て本綿うるや門畠　吉窓
ゆえうら吹風の本綿元　尚屯
母の音ふ知らす泣ふや本綿取　芳緒

鹿笛

鹿笛の試こうや春ぬうち　喰風
荻笛も採て吹ふうり庵の陳　柳風
鹿笛や風の加ふりて近うなる　清玄
鹿笛を表れうゝ〳〵海り宿　淇山
ゆうこゝ吹ふうけられす鹿と笛　為勤
鹿笛や月新ふなりて納ふ法　上総　成路
荻笛の上ふを鹿といふうれうり　相模　歡亭
鹿笛や秋の表れを吹ふす　一如
荻笛や吹近すれ蜀ふを笛　上毛　玉蕉
戸口うう鹿笛うける山家うう　近山
二歩月を笛と知れうり近い鹿　義琴

麻笛の音きの外も風もなし　信濃　納梅

荻笛を出るより毋よ新うれて　吳雨

鹿笛の上るも人を信ぜるか　琪園

ふうふうと吹かくるる射を保色て　寸芳

麻笛や静へ祈る子ハ吹覚へ　芳律

蟷螂

蟷螂や子かけまも似すの脇さ　上毛　梅白

蟷螂の斧も甲斐なし弱は甫　嶽琴

斧上て行工むらんいふむり　一和

かまきりの意地や風も手搏へす　琪園

蟷螂や斧ふり上る新あらし　清泉

蟷螂の吹うれて水る流れ　歌年

蟷螂の健さ車を向ふ　東京　孤芳

刈まるを乗ね迎まれそいふむり　芳律

蓑虫

蓑虫のふるふ帰ふる知られる　喧風

蓑虫おなるを自新も悔られ　琪園

みの虫の風ふる庵ハ細音れ　歴山

蓑虫やゆらゆらすれ鳴ません　素白

ふの中や同すすす眠られす　雙松

蓑虫よおちのふるまれ秋　芳律

ふふふふふふの中なるん今の声　文禮

冬鶯

鶯や霧の冬鶯のとうふ　義琴

[illegible]

我　近山　羽後　弄山

[illegible]

一雪　貞峯

[illegible]

月柳　逸水

[illegible]

琪園

[illegible]

文禮

[illegible]

芳律

鶺

[illegible]　歌年

[illegible]　一和

[illegible]　上毛　井月

[illegible]　玉蕉

[illegible]　以孝

[illegible]　一雪

[illegible]　寸芳

[illegible]　白羊

[illegible]　芳律

稲雀

[illegible]

一二羽そゆるして措きぬ稲雀　仔鷹　花鶏

淡し呼ぶ声に立ちし稔田　貞徳

秋を作に寄るものあるを鳴のやと里くの稲雀　里憐

鳴なれば知るも知らぬ稲雀　嵐琴

近もせぬ田うらも立ぬ稲すめ　一瀧

雀よ知れ人に稲を寄つ羽音　風路

穂を雀にきらん刈耕地　春齢

穂

指ひ〳〵半にあらぬ穂の　芳律

泊りも借つひ指て半穂哉　吟風

穂稜うみ門閑梨の花咲　湛山

穂風　以考

豊さを知るや穂の穂　いと道

指〳〵てもも〳〵もあり穂の穂　栖風

稲原もあるもあるも指ん穂の穂　蘭雨

神垣や穂の穂指〳〵ては〳〵重く　浦柳

年貢の役として指ん落穂　我琴

舟賃に添て投ぬ穂の穂　士行

旅人の笠よさ〳〵ゆく落穂哉　庫文

道や指〳〵穂の穂　吳雪

指〳〵ん小藻の穂　白水

旅ものうら見ぬ蕭の穂の穂　一如

山さとの小粟も指ん穂の穂　汐翁

旅宿の指〳〵て来る落穂哉　武秀　一顆

大佛のまに上る蛙鳴れ　芳緑

崩簗

音程も水も流れて崩簗　琪園
枝川に溢る水や乏れ簗　史山
鶏うつる簗の柴の崩簗　玉桂
川中の俄に虎ヶ生ふ如　素泉
柳の枝くぐる月の崩れ簗　為勅
時雨はつうぬ雨すぢ崩簗　琪山
崩簗手のつけやうもなかりけり　月翁
面白う月の寄る中の乱れ簗　杉北
玉川も姉やいよ〳〵崩如　芳緑

秋声

寄る心さそふ〳〵水の秋の声　喰風
松風も松風よりて秋よ　琪山
川節や柳さうの秋あきの気　為勅
夕雲や野部合う秋の声　蘭雨
秋〳〵秋もあるよ秋よ　仁
秋扇や置楽よりく秋の聲　義琴
蓋陽や寄せ来る浪も秋よ　吳羊
水中耳寄すれば宮の秋の声　歴山
松風や風もなけれと悔の気　一滅
秋の声友の声の陸へ〳〵　琪園
寄とり〳〵仲うるあるや秋の聲　吳宦
知らう愛まるる似ぬや秋よ　逸水

松風に秋の音ずれ　越後　稲川
針程の音にも知るや秋の夜　一瓢
降れば雨折れば山や秋の夜　東京　江左
折しも人に聞かるる秋の声　眠露
月の出て大仏殿に秋の聲　芳緒
松松も年の高らむ秋の夜　文禮

秋蟬

暮中も鳴きまわりけり秋の蟬　喰月
鳴うすくなりよき夕暮を秋の蟬　聽泉
撞放す池水の上やあきの蟬　義琴
秋のうち翌日も日和なり鳴かれぬ蟬なれば蟬の鳴きぶり　素白
史山

指折て待なり秋の暁の蟬　吳竹
うき旅や心中に鳴く秋の蟬　仝
声消ては野辺にあり秋の蟬　吉窓
秋の蟬撞るまかなく知るべかり　琪園
京へ来て聞く鳴しの秋の蟬　雙松
遠寺の連を聞くや秋の蟬　齡亭
鳴くなれば耳の次なり秋の蟬　武蔵　市峰
音なしと思ひ時なる鳴や秋の蟬、　春二
秋の蟬鳴とつすは人なるべし　松北
聞へなり鳴かすとなるべし秋の蟬　東京　一山
名ある寺鐘急なる秋の蟬　陶屋
京の蟬撞城野の秋なり　芳緒

秋山

人ちりて高うなりぬ秋の山　嶺風
杉の眼をつけて登るや秋の山　梧風
磯山や秋の姿を水うつみ　吳吉
眼のうきくちうくに秋の山　岡美
吟なれぬ名の声あり秋の山　青圃
吹風の吟ぶし秋の鶯赤山　一山
ちるもちに寂をうるや秋の山　芳緑

秋海

月の出て吟ぶし秋の海　岩代　青山
翌るを照る入日の色や秋の海　上毛　楚江
中の新あるなりもの秋の海　雄吟

白水の海
高峰
寂峰
月待
松虹
吳羊
庫文
琴芳
清象

うもてゆる波物凄し秋の海
眼の果や只大空と秋の海
月の出て島色ふる色ぬ秋の海
淫の中空と深き秋の海
おそ秋の帳新しきの秋の海

寒月神祇

物さや湯立ありしの夕月歌　相模
神も出て拍ひたまふ宮の月
名月や柏を箸に森の中
玉垣や賢木にもれて月さえ
宮守の月見ぶしや名花先
神殿と光りかくるの月

月仰ぎて拝てゝて西新あらら　友山
月清し　一本の月をもれて神の前　青山
野社の淀なりしかく月見ぶ　蘭雨
月参て押合ふ人や里祭　素泉
松新も尊し　月の社うつ　聽泉
月すむや　白ひも清き官柱　以考
清屋る月の光りや神の池　一多
官の灯はとろとろと仕たり月の淀　丈芳
玄守の掃除して居る月新ぶ　吉窓
神酒や　月に心あすかくし　芳樹

月の蝕

蝕の月もさぶしく月の白ひぶ　嘯風

中宵より暮りて月の蝕　月鶴
月の蝕　稲風
吟てうろうろして蝕きたり月は仕　淇山
蝕は月や　好の来て来る膝　一多
舞るとり人も寒ぬ月の蝕　明野
さらきたふ寒き　秋半を月は蝕　逸水
嘆もしらせぬや月の蝕　幾琴
月の蝕まで歩き　淇園
舞忘れて陸り月の蝕　青園
月は蝕松の声　士行
居るや中に形ぶや　月は蝕　鯰亭
人声の暗くゆし　月の蝕　東京　鶴雨

蝕果て老ぬ月の光りかな　文禮
村々のかがるを憂きを月の秋　芳緑

秋俳諧

我庵は松を洗ひ嘲り　俳諧ぶ　唯風
あるじ訪ふ秋よりぬ　俳諧の　梧風
野の寺は俳諧や菊の花盛　真歩
閑しさ西行秋のひぐらし　奔峰

信濃

菩提寺の秋より　俳諧ぶ　公雄
泥の音出て出帰るひぐらし　湖梅
俗流る秋の　俳諧や池の水　時月
口癖の異なり　放ち　俳諧う　玉蕉
秋を乞ふ　に　俳諧　伊豫　蘭亭

実は稲　俳諧ぶ　成路
寺町を秋を押ひぐらしかな　亀鈴
原られし柿の裏たし　俳諧道　丈芳
嵯峨寺や秋を　俳諧の人世の　一山

東京

霧に祇園　俳諧ぶ　さと子
落ゆく秋なき　庵の　俳諧うれ　芳緑

芭蕉

いうらの雲きるゆふ　芭蕉ぶ　下総　旭高
ゆ〜降る雨を音ある　世紀ぶ　白水
鈴鹿の時雨　芭蕉ぶ　一和
琴止めて毎の音　芭蕉ぶ　俳園
月時雨霧は流るる　世紀ぶ　仁

無心や芭蕉をたたく秋の雨　吳雪
葉の月に夜室の灯るもせぬ　幾琴
降るほの心芭蕉もまたかな　嘯風
枯すがるもの芭蕉の遠雨　素白
旅僧の蓑ぬぎ干す芭蕉うな　蘭雨
芭蕉植て月見る庵の小庭か　梧風
月をして庭一杯のもせぬうな　清美
葉の雨や山を窟をる芭蕉か　友山
芭蕉葉や南無阿弥陀仏　尚屯
吹あらして机のうへ雨もせぬう　鶴西
降れば中に玉巻く芭蕉うな　文禮
巻かれて雨の灯の映るもせぬか　芳緑

野菊

一鼎　東京
腰に深さしてみる野菊か　岡美　鶴渓
抜てゆく手ぬぐひ野菊きくれ　春芳
侮れぬものか野菊も蕊ぬ　芳緑
さしぬきの白に香の奪る野菊か
侮るなかれ野菊をもゆく

紅葉

戸口まで秋のせまりて紅葉　琪園
紅葉して雨月たかの野山か　杏窓
名も知らぬ仲も紅葉の脚色うな　清泉
門をくぐ八潮出るの海の紅葉　上毛
岩もとや元と葉の仲ぬ紅葉　五山
巌琴

白妙の不二の根路や雲もなく
ふもとの山や小雨降るらん　紅葉
紅葉して樹立そうの峰の路
夕暮や星もなきの路の雲
蘭雨の立つあとの都の山紅葉
一和
花もなく雲もなく果ぬ紅葉
古山
しぐるるに落てもはかなし紅葉
中峰
熊笹の中一筋や初霜の陰
沖の白
子の日の松の緑に道の雪
芳緑
陰山や水のくたあるの山の紅葉
文禮
楓の實
掃寄せる水の葉に交る楓實
吳雪

立つ名は嵯峨より飛す楓の葉
逸水
降時を宝和楓實の
青園
第一は遠の楓實の
鶯垂
水の樹に飛れてある楓實
白水
知れ知れぬ名のみてみる楓實哉
幾琴
実の為て楓と知るぬ一里塚
月翁
いう人水の刻を小ぶきを見れば
以芳
業なるなりさらなる香の楓の實
東京　紫雪
昭れれの枝もちる楓實かな
一山
楓の実落せり文堂の橋
翁西
江を為て楓実を日和の
芳緑
日陰に飛れて句の楓実

鶉の雛

雲も孫あるらむ鶉の雛　唯仏
家なしと言ふ鶉の雛　蔭山
柳橋なる雨の雛　上七　一葉
数あれど信きはのひなの雛　素白
住吉をめぐる小里やはなの雛　近山
雛鳥の鳴く海辺の雛　玉桂
鳴くなりあるとも鶉の雛　一鐵
家と名のつくも内鶉の雛　吳童
内裏雛にて鳴くむ栗の雛　仝
鳴くもかなく新の雛　武義　蓑柳
金屏も違ひあれとはのひなの雛　千峰

雛鳥に枕の人の雛
鳴くも秋の隅れの雛
雛鳥にて枕を敲む嬉かな
泊らずに寄る泊のの雛

雀（海鳥・蛤）

蛤となつても鳴らぬ雀うな　蘭亭
蛤となるも雀の鳴くたく　吉窓
はまぐりになるの淋しの雀　蔭山
蛤となるも雀はかりまし　玉蕉
蛤も鳴て寒し田の雀　蘭雨
蛤となるもたくぬも鳴す　千峰
蛤耳なる雀の浮あひて　白羊

琪園
仝
さと子
芳緑

貝よりなる崔の陣く生て枯し　芳緒

秋深

かつれ家や冬を憐る釣り舟　三河　蓬宇
刈あとの葉山ふもと秋深し　義琴
秋深し雲の峯人間るゝ八重葎　吉城
秋深し　蓮よりたる蕎の実　井月
憐深し　風ふき　歷山
秋深し　鳥の鳴　望山
秋深し　野ハ芒なく　なまの色　静面
秋も中ふり　雪京色　山市き　松帆
類仕ふ　職人町も秋深し　友山
秋深し　撞く山の奇くゝえて　芳徘

御取越

世里を他家にて　なし　法越
法元越あとを嫁とる　孫きのな
一心のよりうなる　法元祝
畑仕ふ　せこも　やはり　法取越
完結して　仕ても　やはり　法越
日和も　伺あり　かつかる　和とり
物ふの不足を　いとも　法取越
ふ伺うて　脇よ　つ　法元祝
年ゝに和の　脇新や　法元
法居同士せ　ゝ　法元越

東京

御命講

喰風　真松
義琴　玉蕉
俳歌　一俄
蘭寺　吳雪
芳徘

美しき色とする　解や　法帖溝　蘭亭
はるゝ人る園扇古雅や　所命溝　士行
多他りの花も白し　所命溝　望山
四ツ辻より出て行る連や　法帖溝　清兵
美しき紅花万燈や　法帖溝　聽泉
花餅のたとへ見せるや　御命溝　可山
書き習ふ楷題目や　法帖溝　芳緑

廿三

家も此を差なから引くされ　唯風
世を引皆引仕舞ふかるべ　雅舞
着ちする世帯たのは　茶汁　連
庵丁の章味よと切れるるかるべ　蘭亭

笠しるを安き蕎やかるべ　東京　青園
市中の上蕎美しき高かるべ　しゅく　文禮
大根おろを分らぬ宮や　京茶　芳緑
付ふ近江茶と尾張味噌

廿四　蕎

見を蕎つきふるや　于蕎と　逸山
数すのらの風や　于蕎の軒　永嘯
明りする窓よけよ　于蕎ぶ　蔵山
是を人思ふこの　于蕎ぶ　聽泉
役よたの孫をはる　于蕎ぶ　吉窓
仲藪に掛　于蕎の　望山
時雨の毎や　于蕎は　近山

日和よき黒き家垂や初午葉
行藪を干葉にせよ　背戸繕ひ　玉蕉
色よしと文葉はうつ干葉を軍　洲叢
芳緒

冬の蠅

吹草陽炎や　死や　紙ふら冬の蠅　唯風
ふるる冬を吹ハ死冬ハ蠅　弄山
寄のあれ藪や　行燈よ冬の蠅　淇山
冬の蠅　死や　陸ふに　日の白い　蘭雨
羽箒ハ風や　死冬ハ　冬ハ蠅　清笑
外葉煙る煙りの先や冬の蠅　聽泉
冬なるうぬくきを　冬ハ蠅ハ　一多
雨ふる吹の中　や　冬の蠅　羽後　真哉

葉釜を伐日のさす　梅や　冬の蠅　青山
よき日和炉　冬ハ蠅　明彩
源氏したんを　相ハ　冬の蠅　連
なりつてふ　冬ハ蠅　公雄
葉中干す小窓の先や冬の蠅　逸水
悔ひし日ハ　冬ハ蠅　幾琴
冬の蠅　ぬ　梅ハ室　一東
逃ゆく日脚　冬の蠅　呉羊
なるうつて　冬の蠅　多祇
もしらみて　冬ハ蠅　一濤
日のさして　冬の蠅　琴芳
代稼傳ふ　冬ハ蠅　一鼎

俳諧にあらの竈や　六仲の幟　可山
日向りや子寺ふ　夫る冬の蝶　一山
迷うてみる夕にすむ冬の蝶　茅舎
人につき日向まりや　六仲の幟　泊船
迷人賀羽の刺うぬ俳す　冬の蝶　蘭亭
嘉果河の袖ゆ　つるや冬の蝶　吳雪
夢うき世日南る　寒や六仲の幟　琪園
馬小屋のるるも　佐うに冬の蝶　芳緒

俳諧

さ〻波ゆ　夫等や見ん　浮寝鳥　弄山
ちるほくと　遍て世うと　浮寝鳥　月物
桂屋る人るる　怖にうきねう　真哉

船待ゆ　夫眺　見ゆ　浮寝鳥　桔風
奈良ゆ　浮寝の鳥や　堤屋　一鳥
浮寝鳥　折りて流れ　浮寝鳥　永嘯
流れるとこそて　流れす　浮寝鳥　青圃
流るゝ　夢のいとゆ　うきねう　鄙庵
さ波ゆ　たゞめる　浮寝鳥　庵鯰
水と鳥　鳥ゆ　日向る　浮寝鳥　可山
鼻るるに向き　ゆう　浮寝鳥　素白
芦の葉ゆ　雪ゆ　こゆき　浮寝鳥　蔵琴
吹ゆ世と　ゆう　入江の　浮寝鳥　蘭亭
雪ゆ日ゆ　寒ゆき　ゆう　浮寝鳥　琪園
人の妻ゆ　きゝ　知ら　うき寝鳥　仝

美ましく自を掬ひ浮揺多
ぬくとうな玉藻の底も浮揺多　淇園
浮揺する多も鶴を帰埋在せ　芳緒
　　文禮

多摩川に出行うあくとあ多の川　喰風
多摩やはらうゝ面の真中に　月彩
多摩や むそとふ ふるぬ麦畠　斉峰
多摩の音に驚くく　雀ふ事　羽後盲人　青柳
多摩やからうと時ゝ　雪の空　明彩
多摩や風する多　声のある夕　連
多摩のあとふ嵐よ　松よ支　淇園
多摩や野ちくの家の夕　煙　寸芳

多摩やそを翠くなむうひ風　貞松
多摩やおもひ浮ぬくとうゝ　芳緒

鷹

やれ鷹ゆ声あはせうゝ船うち也　喰風
鷹すゝてはゝてゝ船すゝ　月彩
鷹拂さ人の目ちゝや市の中　清美
条の多ふ一羽も帰うぬ鷹ゆ沈　玉桂
鷹ゆ鳴られゝゝ世ゝを嵯の月　幾琴
鷹ゆ外条の多ふ足ぬ鷹ゆ沈　歴山
さゝうゝ雲の嵐や鷹の声　五山
鷹の背に松ゆ業越の旭うれ　近山
鷹ゆうさ松うち風の吹ゆうゝ　明彩

鷹啼て雪ふる風すさまじ　岡美
はきれ鷹のきるひまこそ松葉かな　吳雪
鷹狩に往来のとまる径うな　仝
人ぶりよくなるぬ鷹の行儀かな　可山
おきれ鷹やうちうちせしめて　松扇
鷹狩や一城の大鼓打鳴ひ　清泉
羽ぶりゆく鷹に吹落る野風哉　真松
鶉をとる鷹やあまりの餌を惜　紫雪
吹出せ一指の月や　たのゆき　倶園
鷹一羽啼て晴ゆく峯の雲　仝
月のぬけて鷹ぶ巣をたゝ　仝
本の石めり羽音や鷹ぶ紛れなき　文禮

且那日和の鷹野かな　芳緒

夜興引

仕舞に膳付ぶ風情なく夜興の犬　相模
林さゝやきをきゝ知らぬ新興引　其外
犬ものゝ声のうらゆく夜興うな　為軌
垣理に獲物をせうく新興引　調梅
労れ音をうえに夜興の床く犬　象年
居酒屋に獲物持て来る夜興引　杏窓
光くなる犬の声ぶ新興引　白羊
ゆうゝて犬も働らく夜興かな　芳緒

羅

羅の衝るを月浮む新川うな　吳華

羇旅とは橋から橋へ通ふ
羇旅や青いけ[illegible]を[illegible]む　歷山
羇旅とは[illegible]る所や川向ひ　青柳
うつけを取くれ者の[illegible]なから　蘭雨
葉漬や鶏の苦仰もせず　真哉
羇旅や湖と川とのあらそふれ口　以孝
うつみや汐本煙らす松の外　杉軒
羇を揚てとたのる子供う事　一知
葉漬やすそを自慢の隠居同士　蘭亭
うつみの獲物は見人に賞られる　吳雪
羇旅や山は弱らん雲もあり　杏窓
葉漬や年と同じ二歯口　清泉
　　雲

可芳
尚雪
芳緒

冬川

風なりに流るゝ冬の川　月翁
納涼なる時多しに冬の川　乗山
唄ふくゝえて冬の川　茲山
如くさに眠る冬の川　秀川
俳諧のうつゝ[illegible]の川　琴芳
沈る影と源と瀬と冬の川　望山
冬の川鐘の音吹へ[illegible]り　一徹
下駄なうら迎せる影も冬の川　仝

冬の川水を二筋よりなりて
飛さうな星の新あり　冬の川　伊勢　長谷鶴
石ゐもつ流れは流れて冬の川　豊前　晩翠
長橋も半開なり　冬の川　東京　閑美
月もまて宿る衛も冬の川　一瓢
玉川も寂ぬいよ〳〵冬の川　菊芽
冬の田　芳律

冬田　冬田かな　喰風
冬の田ハ鶴よ新けて眺をり　聽糸
時は勝あり冬田かな　以孝
水も又休ませて冬の田かな　公雄
あらうのもう〳〵不意る冬田うな　遊水

冬の日の美中へ冬田ふれ　青我
冬の田へ斜小ぶ伝通り道　晴月
ぬくもりに新の踏ぶる冬田う事　葉雲
外様に雪の貴する冬田う形　狗翁
冬の田に道をつけり里童　芳律

冬野

冬の野や松の旭の大小き　巌琴
冬の野や曙ぬよいのぬせ時ぬる道　時月
冬の野ぬ　見えてる冬の道祖神　近山
冬の野や　帰る物　上毛　一島
冬の野や　見えてる冬の道祖神　一菓
枯はてゝ冬のもなきの野ぬ　青圃

只寒る牛や冬野の夕日哉　逸水
冴て牛ゝ道ふ雨ふる冬野哉　琪園
急い行き哉――冬野を縋す間　仝
只一羽鳴――冬野の夕雲　吳青
山に雨降りて雨ふる冬野哉　晩翠
牛ぬる哉　冬野の嵐哉　一雲
里の灯ゝ見えても冬野哉　秀川
冬野や雨降ふ山と　秀川　義母
見えて冬野哉――冬野の一ッ家　松雪
冬野や少ゝ降ふ　雨降　蘭雨
牛遠の急く行き冬野哉　椿風
眼に入るものとて只冬野哉　清雲

行く人ゝ風のまつはる冬野哉　鶴彼
冬の野や経よりも遠ゝ　芳緒

冬空

冬空――先朝日の空や　春山
月の出て明るすゝ西の空　秀川
冬空の景色哉　聽泉
花の咲く本あり冬の空哉　為勒
冬の空冴て雲なくて　琪園
今日も又降ら降る冬の空　丈芳
よく晴て冬の空　古窓
降るものゝ知れぬ天高や西の空　同
雕冬て八ッ戸を川や冬の空　芳緒

冬日和

なす業もなければ暇なり　冬日和　嘯風

芽心を抱く木もあり　冬日和　歴山

色のまさ垣根の美和　冬日和　上毛漁遊

汐湾を汐本干すなり　冬日和　晴月

舟卸し　冬籠る人や　冬日和　戦琴

室の戸も閉ぢてあるなり　冬日和　信濃　秀山

筑波根の白きこそ冬日和　湘楠

繕ふ網ひかるもの冬日和　清泉

炭積出す小舟や　冬日和　戦年

手ぶくろ売屋の海や　冬日和　一和

田を畑よりて移るなり　冬日和　青柳

冬の日和の風　安川　寿女

温泉屋町を按摩の笛や　冬日和　寂鶯

年賀の新聞や　梅も冬日和　一山

梅迎へ波の音や　冬日和　尚毛

枇杷の花　芳雄

散るもきなくて枯れ　枇杷の毛　淇園

新日向なき咲ひとつ花　晩翠

枇杷の花ちり　小方町　花鶴

雪降り地面や　初雪の毛　吳宣

藪道や　雀の鳴す　枇杷の花　杏窓

かけ金のあらぬ切戸や　初雪の毛　嘯風

豆腐屋にうりあるくや枇杷の花　弄山
咲るやも散るやも急ぐ枇杷の花　琪山
袋掛にふくらむかまくらや枇杷の花　一茶
家に出て奉行をまねくや枇杷の花　貞徳
咲るやも散るやも枇杷の花　青柳
横さまにさすらひぬくしひはの花　青園
今日とりの盛りもさびしひはの花　鼎亀
枇杷咲や金ならぬ仏ぬる木戸　丈芳
日のさしてぬくき白いや枇杷の花　白華
是程に咲て眼立ぬひはの花　芳徳
散さまも知らぬ色なる枇杷の花　文禮

吹草祭

人山や吹草祭の鈴の門　木風
吹草情の壁絵うて祭る亀　斎峰
兄弟子は家形の吹草祭かな　以孝
若世や吹草祭の御法の新　為勒
祭るるや藤の棚山吹草に　聽泉
子は兄に座を元る吹草祭　青柳
吹草情は唯翁く祭るの日　琪園
弟子達も仕て吹草祭るる　映翠
真似て祭るや庭の大吹草　杏窓
賜るや吹草祭は窓枇杷　柳絲
初なんて吹草祭るや御法の家　李陸　東洲
香るやも吹草祭の投蜜枇　青園

不意なる客や吹革の貴案　琴芳
祭るなに拵えるものあるなり　士行
祇園町と知らるる吹革祭る事　幾琴
吹革情を子供にせよ　祭の日　す芳
早起や吹革祭の祇園屋町　芳雄

鰊　鰊

鰊鰊を切るもなに仕るなり　吳峯
船行や足鰊鰊に乗る德利　幾琴
鰊鰊や刺身なる料理屑　洲巖
鰊鰊や料理部屋の掃除　玉蕉
あんかうの骨あひるや鍋月新　玉桂
鰊鰊の膳や却け筵吹るもせん　月新

あんかうや骨に鰊の料理　仝
鰊鰊や水の重なる刺身　尚雲
鰊鰊や酒なる船に乗る　芳雄

牡蠣

汐風もいとはぬ牡蠣拾ひ　上七　洲巖
牡蠣汁に皆義合や風呂焚　幾琴
牡蠣むきて居るや廉屑を焚なる　一菓
不意なる客に牡蠣むく夕へぶ　玉桂
安房にて汐間待ちて牡蠣拾ひ　素白
牡蠣房や雖陽雄浪のよする巖　下七　機得
牡蠣むくや後ろに寒き月のさす　一和
牡蠣喰の知らぬ来たる荒日和　幾年

衝冠る春に肥る気岩の牡蠣
牡蠣むくや海をうしろに蒲原風
かき汁や河豚よりうまく河豚を向けてうら
温泉逢上をさすや砲撃の風味哉

文禮
芳緒

鰹

鳴るは日本橋鰹の初ものうれ
大声は今朱とりよ鰹荷かな
昌布の香や初鰹の吸加減
雪降るは鰹をうるや鰹の漁
幾つ先の独て生ぬし鰹の数
鰹船や雪を上るは着く渓
引ずるる音や鰹の塩加減

唯風
桂風
青山
告窓
鷺中
尚雲
芳緒

鶴

蒼寿や鶴帰て月冴ける
鶴や枯て骨ばらぬ塚の松
鶴や捨子のあり松並木
鶴や凍き水の音ばかり灯
鶴の声や雪とは初もれ
鶴は影る旭のさす木の目ぶ
鶴の帰やよい松結い月新
鶴や雪ちかう見る寒さ
鶴や雪をかくらぬ峯の月
鶴を屋ものるなり谷の家
鶴も佛さへ鳴うす神函山

巌琴
士行
玉蕉
一鼎
東峩
為勧
清真
淇山
泊翁
芳緒

枯芦

枯芦や六斗一足付けたる鮭魚酒の
芦枯て細う切り切り丸太橋　喰風
船繋ぐ本あり芦の枯る岸　斉峰
芦枯て波舟情近う却ひ　清美
枯芦や呼へ籠出て来る海守　常陸　一和
枯れの中や小魚の踊る音　姫路　永嘯
枯芦や空うつきき水は色　歴山
伸さうに残きうの芦の枯る色　吳羊
枯芦や光りすると月の縁　播广　孝女
枯芦にちる落葉月の影うれ　杏窓
芦枯て水音うつ内へうつ　琪園

芦枯ぬ樹樹の水は絶てから　芳緒

冬の梅

足ぶ来ると寄せ俳や冬の梅　喰風
樹咲て冬を高う中を通う　清真
冬新のうつ日や冬梅　真哉
冬の梅咲りまこと花ぬ日向ぶな　一多
下枝も切ぶ八咲ぶる冬の梅　永嘯
蕾の有の冬て足向うの冬の梅　逸水
枯れ蔵を花から山野風や冬の梅　琴芳
納め本の梅ひ　咲て　近山
咲れぬ吉ぶ中冬の山茶　吳童
冬て房る咲き　ぬ　咲ひ
冬の梅　琪園

月の影を訪ふ人いかなる冬の梅　織年
なるらぬ月日の下や冬ごもり　春女
樹深うして鶯れ日　抱て冬の梅　岡美
掘先ゑまする日のぬくしうめの梅　青圃
見ゑまく月の嶺　初て冬の梅　英仙
屋ゑの蕾もまるく冬の梅　芳絃

寄雪述懐

窓明るく斗りを老の雪ふるの事　喰風
降積る心都ゑ　歌の雪　青柳
老の眼ふるまて新毋　雪の蕾　聽泉
老られた深かるまや　雪の蕾　呉羊
ゑる年や雪ふまて　ふるまてふり　義琴

歌年　玉桂
歌年　沙巖
雪積る　東曉
雪積る　彩波
雪積る　芳絃

雪折

雪折や　然ゑり共の　拍ひゑる　巌琴
雪折の　ゑふ仲ゑ　ふ借ゑれ　青圃
雪折や　必れと耳に　ひまを　世人
雪折や　熊の意恨の　胸はら　湛園
雪折を　見て追く　心老ゑゑ　杏窓
雪折を　祝て　ゑゑ　素泉
雪折を　祝て　ゑゑ　亦峰

雪ちりにちはらく世界　廣少路　青柳
ちそれたる雪や唐紙の　対芳　尚雲
ぬらし　ちり酒の直鱠を雪ちりに
ちつけ　雪も笑ひとすりよりの　為芽
雪ちりはつて立たる　池の鴨　芳緑
うかね等の雪ちりそ　隋子　文禮

雪声

雪声や甚安斗り春の灯新　晩風
寒声や　橋を限りの往来　月粉
雪ちりや老て孫ちりの　遥好　真哉
雪ちり　時も違ちに　橋の上　語山
寒声や　強更　星の光り　青　永嘯

雪声や加茂川　鄙　北方　琴　琪園
寒声に夜を　ちん〳〵と　乞　杏窓
月の新い雪声　ちく　竹　蝶鼎
雪ちりや　夜毎　〳〵ふ　家の　葉雲
寒声や　雪の積るを　見て　加心
雪ちりや　こそ〳〵と　言て　葉雲
寒声や　雪ちりの　ちを　新心　芳緑

餅花

餅花の下　ちり　雪　春住　晩風
餅花も　凛と　咲せ　新度　以春
ちも　知や　雪の　切者　梅仏
餅花の　月新　ちり　灯新　春峰

[illegible]　清眞
[illegible]　蘭雨
[illegible]　俱山
[illegible]　春川　蓼女
[illegible]　上毛　松洲
[illegible]　琴芳
[illegible]　玉蕉
[illegible]　一菓
[illegible]　信濃　青山
[illegible]　東晓
[illegible]　吳雪
[illegible]　寸芳

[illegible]

古暦

[illegible]　古暦　巌琴
未だ[illegible]　用もあ[illegible]暦　春女
[illegible]　古暦　倩梅
[illegible]　古暦　月翁
[illegible]　古暦　一魚
[illegible]　文禮
[illegible]　芳緑

年の夜

年の[illegible]　月翁

雪吾嶺の雪て年の新はる夕
年の夜は閻魔帳 浪華町 秀川
年は新も安き鼎や寄まくら 為勝
としの夜は身與まし機場所 本郷
をゝ出人結ふ人年の一夜うれ 真鶴
年の新や可笑かゝる義の名 望山
ないやう結ある年の新は 時月
年の新は永ゝ雑人のうへ 呉羊
年は夜や強に閑ふ人のうへの数 松洲
としの新や灯火細る 素白
年の新や餅光て夜す 曇し 青山
喜は吉の年は新ふ急 陸奥 松風
東曉

年の夜の蝋ゝや呉さの人て踊て
ふは新は新や 街のふ数 青圓
年乃新や蕾ふた 庭の綿 鶏鶏
年の夜や花の結は 撫ふん地 真松
やゝは新や異なゝ町の人面 寸芳
年は夜のすさふる帰る利ふな 芳緒

年の名強

富士の山年は名強に見て雲ふん 東京 永機
置ふ人ゝ 机も年の 名強ふ命 上毛 吾岳
扨灯結門掃く 年は名強かな 芳我
富士ゝすゝ夕日も年の名強ふ素 時月
窓明て山見る年の 名強可新 一誠

喇竿かへ〳〵煙管を年の名殘を
拭ふ朝や名殘の年は尽
流れ湯氣の煙り〳〵も年の名殘が
惜て掃く門も今年は名殘が
膝掛に捨きく年の名殘うれ
風吉陽歌す音さへ年の名殘が
ふせて寒く手鞠も年は名殘うな
年せき歌今更を〳〵也名殘う事
書切り〳〵年さへ年の名殘かれ
名殘のもの〳〵も年は名殘うな
淀こなき水のもとの名殘さ
大宝に新名る年の名殘う事

喰風　東京
聽泉
位
素泉
爲勒
　秀川
妻女
永嘯
公雄
逸水
一和
告窓
　岡山
弁絲

年の夜は名殘を〳〵とまるよりう
年歌近〳〵年の名殘の淀〳〵舟

文禮
芳緒

四季文題

追加

雪の中乾きしり風白和
跡に出れ月明りよ夜のある素が
香盆に載せてあり梅雪美
こゝ之遊て夕宝の濃き柳うれ
有られた歌を昔より梅よ自
歌椿拾へ月西の鶯れ
拾ひ香や今蓋しり井の煙

東京
逸朗
一鶴
風扇
大坂
米舟
君石
伊勢
耕雨

今日こそはつゆみ拾へちる紅葉　尾張　荷庵

美の風人の機嫌を吹まよふ　三河　麝香

嘗やひとまつ〻に日のゆふ〻　玄山人

初雪風や曙簾の白み通り町　横濱　史旋

美方未だ〻〻籠ぬ〻衣　相撲　秋月

京へ出て春てもみられぬ美の面　下総　旭秋

知りぬ月よ盛り過ぐる藪の梅　上毛　晩芳

見古した山ともいはぬ義　下毛　辭竺

初雪やかしこき人の心業風うな　加賀　東洞

泳き日や明るきなしてもて窓ぬ雲　岩代　壮山

突ゆくを教へて講る多まりかな　羽後　香稲

沙る湯のくり届くや　福岡　美月

葉の茂り今日の消りも足まかせ　出雲　柳絲

揚りてもあ夫地たかくる雲雀かな　播磨　淺芝

嘗に逸てて宮めく山路可奈　伯耆　善園

四五日ぶ梅の方がする月新代　紀伊　唫圃

新ぶ水に映る軒ぶ花の月　芸州　晩翠

初鰹の拾て来て日和続き亀　芸州　丹楓

暮も未だ拾た斗りの扇かな　近江　九峰

夕空ぶ唯ぶ〻〻ぶ〻ひ〻ら　伊勢　可同

只廣きぶかり行るは　紀伊　唫圃

親のある人義〻初松魚　芸州　晩翠

降る雨や暗の月たゞ国のすみ　肥前　吾生
閑古鳥啼と初夏いかゞ哉　常陸　丹楓
雲さゆるうしと啼に不ゝきまく　仙台　南山
意味落れ蛍憐る散歩哉　羽州　香稲
冷汁や昼の戦も初もうき　上毛　晩芳
松新や虫ゝ一枚甚平衫　下毛　碎竺
旅も年の歩き疲迄や袷時　尾張　一の翠
明歩き新し補ひや紙の雨　三河　蟲香
一編ゝ夜を明息ゝ牡丹かな　遠江　十湖
世の中やしら風扇ゝ表　相模　籬山
先へ子はゝきはゝめる粽うれ　秋月
涼風や二階をさかれ恰の糸

掃ゝ出ゝ足ゝきの小八今日の粽哉　閑蒙
逝年を先人是ゝ麻の子うれ　朱京　鳳嶺
棚下にもされなゝみや橋納涼　、　融水
年寄の粽もの加さ紅袷の亀　尋香

さゝ引ゝ石に琴一面や蟲の秋　三河　石芝
紛れなき秋の深さや苔船　、　蟲香
月よ人秋の天さゝもかゝ亀　上毛　晩芳
人新ゝ共ゝ更ゝ盆の月　下毛　碎竺
数つゝて世をみゝ世亀稲莚　信濃　逸水
細解て初て涼ゝ旅衣鞘　常陸　素心

菓の香や　惜まるゝ日の蕎麦　羽ほ　露月

寄て来た馬を若葉や角力取　芋ほ　香稲

足心のあれ勝ちなる冬炭　紀伊　舟枫

町へ出て名を受くる菓子の宅　相模　喰圃

新米や　寒みあくれば近江瞰　東京　月嶺

うしろから月の励ます殆うさ　文禮

考へてさゝぬに　仕たり月の門

新酒の香や　家中の忘れ驚かす　三河　石芝

こむ中を出ぬけて来て一度ふ路　素信

箕屋や　未だ明きらぬ藪の奥　露香

初宮や　住ゆ住ゆと神の家　伊勢　社樂

山茶花や　崔の這入る奥住家　紀伊　松年

新米に　庭掃て見れば小雀　喰圃

寒月や　地を這つかぬ下駄の音　芋後　舟枫

本もうえぬ都の町に　蕎屋れ　羽後　香稲

名ばかり　心ばつかりの月　露月

初雪や　松の景色の十二分　上毛　晩芳

水仙と　寒中　僧侶の　椒の先　下毛　碎芝

寒月や　寒中　しみつく　松ヶ枝　常陸　樵翁

菩提樹の下陰たの色　寒　苦自　素心

月をかくす力もつきて　蕎屋　載　芋よ女

有明の　消る光りや　雪の上　信濃　逸水

今時〻景色や雪の棹掛　相模　永月
翁賣の親〻てゆくや蕎麦　東京　風嶽
こゝへ来て分別まよし年の関　芳緒

人の来る手伝ひ求めり紅の蕊　羽後　隆風
芝蕚の花より新ぬる月　上毛　義琴
引際は立寄りゆの次をめて
たき捨た火は赤く燃るなり　琴風
雪の小春拾んて捨れハ雪ぬ
肩廻るかと駒〻さゝ帰　琴風

ウ

老僧の佛こゝろの尊さよ　琴風
三度は食に金山子味噌　風琴
美奪〻て流れ象めき〻面白さ　琴風
温泉湯沸れ湯沸痛高き　琴風
袖の下意の幸信よく利て　琴風
踊洗衣はきらい蜂の香　琴風
こゝの汁ゆ〻空縁〻育自鶴　琴風
弱りもいく〻と美き牧場　琴風
おもひ出に紙を継ぎ糊屋　琴風
又壹関より物の申かある　琴風
鮫〻〻ゆ〻〻なる美と愛　琴風
鮫を海むるを見嬉義する　琴風

来風おし吹まり道のはかりて
琴　面りませねとも膳ハ最うまい
風　面側を許沼浦たらひと安堵
琴　帛紗にあまる水引のはし
風　梅梁まもの数いとたれ流
琴　わきからそれ鬢粧まき鼻
風　初雪のわつか降てを酒ろを
琴　こゝまら雪もし寄ぬ〻の鐘
風　入鐘る名羽のこなしの陰水船
琴　あてはありれて新まま用
風　月の柿こゝしを洗を早うぬ
琴　祭りを移宜の秋仕のらし
風

鹿きゝの連てぶるひつそりと
琴　こゝらは山ハこゝなこを立
風　豆よわをそ樹て牧たる野の侯
琴　津浪のゆはは半分を嘆
風　咲くれ鬢そこをかゝこを花ほゝり
琴　大戸の長閑阿仁は暖
風

水仙のまつとまらしき蒼うれ　三河　石芝
琴　囲ひは菜のまり〻を陸　芳　律
魚きれは豆腐料理を際こちて　芝

押かへ書き給ふのある人
名をかへて月貢に面をつ　芝
河茄の帰に餅加減を知る　緑
ひやつきも一服もきしひとり家　芝
世をと思ふ間きやそて居る　緑
頬杖て考ふ鍬も和もひとり　芝
音もせぬ世にてり一般捨てゆく　緑
紙やかな湯年の祝たそかれて　芝
加藤の競馬はあとに沈む月　緑
指折て考る十年き矢の如し　芝
窪む現もさて命なり　緑
油買塗買物のあ湯多　芝

二月

五段　長屋に居る徒士の流
初午も普請もよかるべし
まつ水といふ遊い約束　芝
雑子年も発狂よも我お情　緑
裸沙の化導貫よこそ人る　芝
さんに降してうるはきを空なり　芝
川原源みの灯かとうり色　緑
素洗りに口三味線のよい浦子　芝
女房達とうこそふまよりす　緑
寄羅好かるも拾いしあ嫌　芝
糸瓜仏とうこ水の砥分　緑
秋もまもなきけもうたる月の色　芝

谷をまさぐり哥子問ふ　芝緑

美人と悟られぬうちは大事之　芝緑

感しゝ入ける今のあまに　芝緑

二ウ

若なからに計うねつゝ話して　芝緑

安樂楊子に色も衆所新　芝緑

稀宜殿ゝ湯殿せられて白小袖　芝緑

朝日風の夢もしなし　芝緑

情事の機嫌をかゝなし花の中　芝緑

岩戸ゝ開ぬ流業よ　芝緑

明治三十年八月十二日印刷
同　年同月十五日發行

東京豐多摩郡戸塚村大字下戸塚四百壹番地
編集者　大舘鍬太朗

印刷兼發行者　大舘整一

東京市日本橋區通三丁目
發賣書林　小林新兵衛